



|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | メディア論序説 : テクストからみたメディア論   |
| Author(s)        | 脇坂, 豊; Wakisaka, Yutaka   |
| Citation         | 独語独文学研究年報, 31, 314-327  |
| Issue Date       | 2004-12   |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/26178">https://hdl.handle.net/2115/26178</a> |
| Type             | departmental bulletin paper   |
| File Information | 31_P314-327.pdf   |



## メディア論序説

－ テキストからみたメディア論 －

協 阪 豊

### 1. テキスト言語学の展開・到達点そして今後

ドイツ語圏のテキスト言語学は、その始まりから今日までおよそ 40 年を経過している。この間の多様な展開を、思い切っていくつかの里程碑を立てて次のように区切ってみる：(1) 初期：P. ハルトマンの理念とその継承(1960 から 70 年代始めまで)、(2) 展開：R. de ボウグランド/W. ドレスラーの『テキスト言語学入門』(1981)まで、(3) 多様化：W. ハイネマン/D. フィーヴェーガーの『テキスト言語学』(1991)まで。

(第 4 段階としての 1990 年代以降の新展開に関しては、以下の本稿で述べる。) これはあくまでもひとつの区分の目安である。1) ここではテキスト言語学の史的概観、あるいは多様な観点の整理が目標ではない。2)

1.1. ボウグランドたちの『テキスト言語学入門』(1981)の第 1 章「基本的概念」では、テキスト性形成の 7 基準が挙げられ、その 7 番目が「テキスト間相互関連性」Intertextualität (以下では「間テキスト性」を用いる) である。それによれば、あるひとのテキスト使用は「すでに出会っている一つ、あるいはそれ以上のテキストの知識に依存する」(邦訳 16 頁) とされている。ここで言われる「知識」Wissen という包括的な概念は、自然な理解のなかで、「一つのテキスト」を越えて「言語テキスト外の世界」との関わりを暗示している。知識・外的世界はテキスト性形成の基礎を作るのである。

同書の第 9 章では、上記の「知識」がテキスト受容者の既有知識であることの具体例が、認知的レベルにおいて考察・記述されている。その前提として「テキスト種類 Textsorten」(あるいは「テキスト型」Texttypen) についての記述がある。「テキスト類型論は、談話行動や場面の類型論と呼応させて行わなければならない」(§ 9-5)。そのうえで「テキスト型のいくつかは、機能にしたがって定義することができる」(§ 9-6)。このことに認知心理学上の「フレーム」や「スキーマ」が、密接にかかわっている (以上邦訳 241)。

---

1) ほかに、例えば E. コセリウや B. ソヴィンスキーらの 1980 年代の仕事も挙げることもできる。ここで(2)と(3)をあげるのは、テキスト言語学の傾向の最も対照的な傾向を代表させるためである。  
2) テキスト言語学の今日的な状況の中心的課題と問題点については協阪(2003)参照。

1.2. 次にハイネマンたち(Heinemann/Viehweger 1991)の第3章「テキスト、テキスト種類、テキスト類型」では、テキストのグローバルな構造がテキストの生産と理解のために中心的な役割を果たしているとして、この構造が「テキスト種類」を画定するための基礎とされている(ibid.: 129)。例えば、いま私が読んでいるのは「手紙である」あるいは「物語である」というような判断の基礎にある「知識」の体系が、我々には共有されている。「話者たちは、このようなテキストの種類ないしはタイプに関する知識を、その言語活動において獲得している」。彼らはずねに「テキストを状況、文脈そして制度に体系的に連関づけることができる」のであり、換言すれば「コミュニケーションの参加者は、さまざまなコミュニケーション領域にある特定のクラスの文脈として認知し、それらを場面的にかつ社会的に適切に取り扱う」ことが出来る(ibid.)。 — このように見るかぎり、この書物の著者たちと既述のポウグランドたちとは、ほとんど同じ立場をとっているようにみえる。

ところでハイネマンたちは、このような知識の体系を明らかにし、テキストの機能と構造に基づく類型記述のための規準を設けることを目指している。「テキスト分類の目指すところは、無限の多様性を示す実際上のテキストを、概観可能な基本的タイプに縮減することで、それによりコミュニケーションの実際を明らかにし、かつ社会的な諸関連や社会的構造を見とおせるようにすること」である(ibid.: 145)。そのために「理念型としての類型学の中でテキスト種類进行分类する」(ibid.: 170)。このためには、上記のようなテキスト生産者における「類型学上の知識」が前提とされている(ibid.: 169)。著者たちは、分析と記述の例として「電報」と一般の「手紙」との比較を行い(171ff.)、最後にテキスト受容者のふるまいに及ぼすテキスト種類がもつ規定作用を考えている(175)。

1.3. 改めて両者を比較してみたい。便宜上、ポウグランドたちの場合を A とし、ハイネマンたちの考察を B とする。上述のように両者は共通して、テキストに関わる我々の「知識」Wissen を前提にしている。異なるのはこの知識の実際である。A における知識とは、言語テキスト外の諸要因であり、絶えず変化する現象自体である。これに対して B では、上記のように普遍的な「理念型」を基礎とする体系化された知識が考えられている。ちなみに前者では、テキスト種類は「間テキスト性」との関連で記述されているが、後者では「間テキスト性」の問題は考慮されていない。B の記述が基礎におく「言語類型論」の手法に対して、A は「言語類型論、すなわちサンプルとなる言語の体系化と分類に対する厳しい挑戦」を宣言している。ポウグランドたちによれば、いままでの類型論はすべて「言語の抽象的な可能性としての潜在的システムに注目したもの」であり、これに対して「テキスト類型論では、選択や決定がすでになされている具体的な現実のシステムがその対象とされなければならない」のである(邦訳 239)。ここには、「システム」をどのように考えるかという意味での、立場

上の違いがあると思われる。B で出発点におかれる「理想型」への方法論的な疑問が提起されている。(下線の強調は原文のまま)。<sup>3)</sup> ここで一般的な言語類型論のあり方にまで立ち入ることは出来ないが、少なくとも、仮説的な類型論上の考察が、テキストレベルでは直接的適用が困難であることは確認しておきたい。

1.4. ボウグラントは「テキスト言語学：新しい岸辺へ？」と題された論文(1977)で、テキストに関わることが、それまでの言語学の地勢を理論的にも実践的にも変更するであろう、と方向づけをしている(ibid.: 5)。そしてこの方向を当初から最もよく理解していた言語研究者として P. ハルトマン(1923-198?)の名前を挙げている。この方向とは「テキスト言語学が意味論と実用論とを、その形式的・解釈的頸木(くびき)から解放し、文法を言語学・認知科学・社会学の基礎のうえで構成すること」である(ibid.: 6)。ここで著者はひとつの新しい方法論を提示している。従来の「部分と全体」の関係軸に対して「手段と目標」の関係軸への転換を提案である。手段 Mittel となる諸単位は「必ずしもより小さいもの」である必要はなく、また同様に目標 Zweck となる諸単位は「必ずしもより大きなもの」である必要はない(ibid.: 8)。この方法論上の新しい概念規定を前提にして、従来の「音素」→「形態素」→「語彙素」→「統合素」という階層的な構造図式は退けられる。その結果これらの諸レベルは一貫して「意味」の系列によって関連づけられて、あらたに「テキスト」と「テキスト種類」とが加えられる(ibid.: 9)。 — やや簡略化した紹介であるが、テキスト言語学を推進すれば将来的には包括的な「分野横断」Transdisziplin の研究に至る、というのが著者の言わんとするところであり、Textlinguistik に代わって Textwissenschaft の名称がより生産的なものとされている。<sup>4)</sup> ここでは既存の言語学・心理学・社会学が、すでに体系化された視点に準拠する必要はなく、相互の更新作用(Ko-Evolution)を行うべきものであり(ibid.: 10)、これら 3 分野は既成の研究分野を前提とする「学際的研究」Interdisziplin ではなく、異なる学術的視点をその始まりにおいて統合している「分野横断」のなかで構成される。ボウグラントはこの小論の最後で、1994年のポルトガルでの分野横断性に関する国際学会にふれて、現代の困難な時代におい

---

<sup>3)</sup> テキスト種類(Textsorte)に関しては、テキスト言語学の初期段階で活発に討議された。例えば 1972 年のビーレフェルト大学でのコロキウムでの重要な論点として、「類型論」の基礎に想定される「普遍性」をめぐる問題があった。理念的普遍性の主張(例 Rieser や Ihwe たち: äußerst erreichbare Allgemeinheit)に対して、むしろ adäquate Allgemeinheit を提案する Weinrich, さらにはテキスト種類の判断に「テキスト内在的」要因よりは「テキスト外的」要因を重視する S.J. Schmidt などが、立場の相違を示している(vgl. Gülich/Raible ed. 1972:15; 59 など)。テキスト種類の提案を行ったのは P. Hartmann だが、彼の考えているのは、あくまでも「その場ごとの」okkasionell なテキスト形成現実態の把握であった(vgl. Hartmann 1964/1972: 18)。

<sup>4)</sup> この名称は、van Dijk の Textwissenschaft (1978/1981) のそれと同じであるが、実質的には発想と立場を異にしている。

て、環境保護の共同プロジェクトに関して、科学者や芸術家たちが自分たちの社会的な要請と可能性を真剣に討議したことからうけた強い印象を報告している。<sup>5)</sup> テクスト言語学がどのような「岸辺」に至りつくのかを、ポウグラントの立場としてみてきた。彼は、ハイネマンの今までの仕事に敬意を表しながら、しかし上記 (B) のハイネマンたちの立場からは距離をとろうとする。その批判は相当に手厳しい。彼らが「文法」をあくまでも純粹形式的な記述に限定しようとしていることは「机上の空論」と言わざるを得ず、<sup>6)</sup> 自分じしんは、そのようなテキスト文法の記述をすっかり放棄した、とポウグラントは言明している。その立場の違いは、ハイネマンたちの「学際的」interdisziplinär に対する、ポウグラントの「分野横断的」transdisziplinär な主張に見られる。既述のドレスラーとの共著である『テキスト言語学入門』をはさんで、言語研究における「実用論的転換」は大きく2分化されたようである。いわゆる発話行為理論を中心とする狭義のそれと、領域横断的な立場とである。ポウグラントの場合、そこには言語学が新しく人文科学のなかに占めるべき位置を視野に収めようとする、発想の転換があると考えてよいのではないだろうか(vgl. 脇阪 2003: 6, とくに Feilke の指摘に関連して)。そのとき、拡大された考察領域に入ってくるのが、メディアの問題である。その際のメディアとは、まず「媒介」を果たすものである。そして言語とは、媒介に関与することでテキストであり、テキストであることにより媒介を果たしているのである。この方向は、ポウグラントたちが、既述の書物で、「間テキスト性」を論ずるに際して、まずテキストの「仲介」Vermittlung (Mediation) の働きに注目することで、さらなる展開を予告している。

テキスト言語学が、それまでの言語そのものに限定された対象領域から、言語とそれをとりまく環境とのかかわりへと必然的に展開するプロセスを追うとき、いままでの言語学的要請としての「論理的整合性」あるいは「記述の精密性」を優先させる

---

5) Beaugrande の最近の関心は、その『テキストとディスコース科学の新しい基礎づけ』(1997a) に、より具体的にみられる。この包括的で浩瀚な書物の最終章 Discourse and the 'Whole Human Being' では、「文化」、「イデオロギー」、「ジェンダー」、「感情」のそれぞれについて「ディスコース」との関わりが考察されている。

6) B の第6章「テキスト言語学展開の方向」: (1)「文法上」と「言語使用上」の両アスペクトの関連性が今日議論の中心におかれている。つまり両者は、個別的に記述可能であるけれども、ひとつの領域での適切な記述は、他の領域へのより深い洞察が必要である。今までは、文法の領域での実践が後者でのそれに先行してきた。その理由は、文法へのアプローチがその他の認知的体系から相対的に自立して可能であることによる。(2) 言語研究と隣接領域の相互依存関係は、例えば (a) テキスト種類とテキストクラスの考察と言語の史的研究との関係、(b) テキスト分析と心理学との関係、(c) 文学研究との交差関係などにおいて考えられる。(3) 各種分野ごとのテキストコーパスの整備による量的・質的な経験的研究基盤の拡大(以上 276f)。

一見妥当な将来への展望を示しているこれらの提案ないし予測の基盤には、「文法」Grammatik と「言語使用」Pragmatik との両アスペクトの分離という著者たちの言語考察の基本的立場があり、その言語考察の枠組みが示されている。

ハイネマンたちのシステム分離の立場を超える視点が見えてくる。これにはしかし、なんらかのメタ理論的な基礎作業が求められるであろう(本稿 4 章参照)。

## 2. 可謬性 fallibilism

2.1. パース(1839-1914)は記号体系の構築を目指した。「アイコン」、「インデックス」、「シンボル」の3概念とその3次性に基づく考察は、今日の記号学の基礎であるのみならず、近年の科学論に関しても常にあらたな視点を提供している。このパースのなかに、伝統的な「論理性」あるいは「因果関係」についての信頼とは異なる志向があったことは注目すべきであろう。幾何学上の公理の妥当性の根拠に疑問を抱く彼は、1889年に刊行された辞典 *Century Dictionary* に寄稿した Axiom の項目で、「公理がいろいろなときに小さな誤りを含む」ことを認めざるを得ないと指摘している(Peirce 1988: 438)。このようなパースの発想は、彼の著作のいたるところに見出される。<sup>7)</sup>

「個人の推論に信頼を置くのはむしろ危険である」(『形而上学』: 16) ; 「人間は自分の理性の能力についてあまりにもうぬぼれている」、「われわれはどれほどしばしば誤ることか！」(ibid.: 19) などなど。彼は、現実の記号の働きが、いわゆる「体系」のなかに収めきれない<反体系性>と連動していることに注目しているのである。

上記の辞典に序文を寄せている、I. プリゴジン(1917-2003)は、パースの「宇宙の進化」に関する考えが、(1)いわゆる「幸運の女神信奉」Tychismus と称しうる「蓋然性」Wahrscheinlichkeit、ならびに(2)「構築的」konstruktiv と「脱構築的」destruktiv の2重の性格をもつ「不可逆性」Irreversibilität を含むことを指摘している(Peirce 1988: 8)。プリゴジンによれば、「力は長期的には散逸的であり、偶然は長期的には集中的である」(vgl. 有馬 2001: 18 など)。この二様の力の相関干渉に促されて「混沌から秩序が」生まれる。プリゴジンに影響を与えたのは、「自然科学はわれわれの言う物理科学と精神科学一般からなる」(『形而上学』: 11)という、パースのアリストテレス解釈であった。その結果「生命系」と「非生命系」との二元論を止揚しようとするプリゴジンの立場が導かれる(vgl. 有馬 2001: 16ff.)。

パース著作集第1巻「哲学の原理」の序文からは、ヨーロッパの哲学的伝統に依拠している著者の立場がはっきりとうかがわれるが、その展開が「すべて」可誤謬性の原理から導かれていることを、著者自ら述べている(CP 1.14)。このパースの「確信」は、ルーマンの「創発性」およびその根底におかれている「矛盾」の認識にどこかで通じ合っているのではないだろうか(後述 3.2.1.)。

---

<sup>7)</sup> パースの「可謬性」についてはさらに W. H. デイヴィスの『パースの認識論』(邦訳 1990)の第3章参照。

2.2. パースは、メディア（媒介者）について次のように記している：「ある人がひとつの石を投げるとしよう。そのとき投げるということは2項的な関係である。それは投げる人物とその石の関係に関わっているからである。[しかし] 実際にはその石にたいして空気が関わっているのだ。ちょうど地球がその重力に関わりあっているように」（Peirce 1912/dt. 2000, Bd.3: 470）。

「石を投げる」ことは「考えること」の比喩である。この「石」に「空気」が関わるように、「思考」に関わっているのが「媒介者」（Medium）である。パースは、「人間にとっての言語は思考のための本能的なメディアである」と記している（ibid.: 345）。彼は、1906年のメモでは「記号」とメディアとを同置している（ibid.: 221）。つまり、メディアは「単なる」媒介者の役目をこえて、思考そのものと考えられている。メディアは、文字通りの媒介者ではない。というのも（われわれが）「考えるときはいつも記号においてである」（ibid.: 354）といわれるように、ここには思考と記号とを不可分のものとする彼の基本姿勢があるからである。彼は思考と記号の2者を「媒介者」において合体させているのである。

パースは、「対話」がいわゆる「コミュニケーション」のなかで始まるのではなく、すでに「前コミュニケーション」としての思考のなかに見出されると考えている。なぜなら「絶対的な個としての存在」は考えられないからである。人間が何かを考えると、それは「彼自身への話しかけ」に他ならない（CP 5.421）とするパースの思考のなかに、「認知的閉鎖性」と「コミュニケーションの自己言及性」が読み取れるかもしれない。ネットによれば、「構成主義とシステム理論に基づくコミュニケーション理論」が先どりされていることになる（Nöth 2000: 243）。

2.3. 「対話性」と「コミュニケーション」を考え直してみることにしよう。ノイズは現代社会における「2重の偶有性」（doppelte Kontingenz）の脈絡において「コンフリクトの要因」とみなされるが、これは決して一義的に排除されるべきものではない。コミュニケーションは＜前規定的＞な目標を目指す代わりに、「選択」の原理を取り入れている。<sup>8)</sup> これは元来人間学的に認められる「コミュニケーション理論の一般的なパラドックス」（ルーマン『社会システム論』邦訳：237）と関わっているはずである。このように考えてくると、メディアは、伝達されるべき何ものかを、常に「正しく」搬送するための手段ではなく、すでに「ノイズ」を不可避免的に含み、まさにそれによ

<sup>8)</sup> ルーマンは、コミュニケーションが成立するのは、「情報」と「伝達行動」の差異が、「接続行動の選択」の基礎となる場合に限られているとし、さらに「理解するということには、程度の差はあれかなりの誤解がノーマルなものとして含まれる」とする（『社会システム論』221）。この考えは、彼の現代社会における「ダブルコンティンジェンシーと不確実性」（同書3章、第4節：181-184）の問題意識から導き出されている。ルーマンは、「コミュニケーションが意見の一致を目指している」という通常の目的論的理解とは逆に、「コミュニケーションに対するコミュニケーションの反作

ってコミュニケーションを引き起こし、展開させる媒介者であることが見えてくる。

2.3.1. いま問題を、わたしたちの身近な分野に引き寄せて考えてみたい。わたしたちが出あう授業の場面について考えてみる。－ 教師としてのわたしたちは、生徒たちがしづかに「私」の方をみて、真剣に耳を傾けている場面にであろうと満足する。あるいは「私」の質問に多くの生徒が手を上げて答えを合図するとうれしい。それらは、授業が成功しているしるしである。これとは逆に、おしゃべり、いたずら、あくびなどなどは、授業が成功していないしるしであると考える。「授業」をひとつのコミュニケーションとみなすとき、それらはコミュニケーションを妨害するノイズであり、排除されるべきものである。これが平均的な授業についての「わたしたち」の考え方ではないだろうか。つまり、授業の開始以前に「到達目標」が設けられてあり、そのために用意された授業展開のプログラムがある。この「授業計画」Fahrplan から脱線することは好まれていない。「脱線」は危険ですらあると考えられる。<sup>9)</sup>

ところで、「理想的」授業モデルを前提とするのではなく、コミュニケーションの遂行とノイズの発生ないし介入とは相互排他的ではない、と考えてみると、ノイズは自然に発生する「出来事」であり、わたしたちは、好むと好まざるとに関わらず、現実にはその時々の「ノイズ対応」を果たしていることに気づく。また、それがごく些細なノイズであれ、あるいは授業の場を脅かすかに見えるノイズであれ、熟練した教師は、そのときどきに何らかの「対応」を考え、かつその対応を通じて「新しい段階」への展開を試みようとするはずである。しかし綱領的に示される「理想的な」授業観では、このノイズの認識の仕方、そして対応の仕方が規制されかねない。これに対して、ノイズが元来はメディアのひとつの構成要素である、と仮定してみると、静粛で「熱心な」授業風景は、突如グロテスクな様相を浮かび上がらせるかもしれない。Fahrplan は、授業の場でのメディアが部分的に形式化されたものであり、多くの予見不可能なノイズは含まれてはいない。<sup>10)</sup>

---

用)を文書形式のコミュニケーションに代表的にみている(同書 256; 428f. 注 48)。

<sup>9)</sup> 念のためにいえば、授業計画に際して、その到達目標を設定すること自体が無駄なのではない。必要な認識は、一度設定された「目標」が決して不変ではないということであろう。このときの「矛盾」相に、現場における授業参加者がどのように対処できるかが問われる。言うまでもなく、ここで単純化し図式化してみたノイズにも、実はより複合的な社会的条件のもとでの実態があることは当然である。そのとき、当面の授業の場は、社会的・政治的レベルへと移行する。

<sup>10)</sup> このとき、いわゆる「間主体的相互作用」についても、再検討が求められるだろう。たとえば、グライスのいう「協調の原理」(1975)そのものを認めただうえでも、その「原理」が会話を「拘束する」あるいは「拘束しない」という「合理性」の基準をもって現実のコミュニケーションを判断することへの疑問である。グライスの「理念的な」会話の要請は、学説形成上の仮説レベルでの意義はあるとしても、実践的レベルでは一義的な判断基準となり得るだろうか。

を見るとすれば、彼は全体の把握が出来なくなり、その場面を制御できなくなるであろう」とやや皮肉っぽく記している(ibid.: 104)。

3.3. 社会システムとコミュニケーションを主題とするルーマンは、意味について考えるとき、「同一性」*Identität*ではなく、「顕在性的に与えられているもの」と「この与えられているものからみて可能なもの」との「差異」*Differenz*をまずとりあげている。このとき彼が依拠したのは、同じく「差異」を言語の体系性構築の出発点においたソシュールの記号理解であった(vgl.『社会システム論』115f.)。ところで、このソシュールへの言及には、1960年代における(アナグラムに関心を寄せる)ソシュールへの再評価は反映されていない。<sup>16)</sup>ルーマンはまた、コミュニケーションが遂行される条件としての「創発的な出来事」*emergentes Geschehen*は、K. ビューラーの「オルガノン・モデル」の3機能の記述からは引き出せないとしている(ibid.: 221f.)。このときのルーマンの「叙述・表出・呼びかけ」3機能の理解は必ずしも明確ではない。本来含まれるべき基本的な理解、記号がコミュニケーションの場において成立すること、オルガノン・モデルの構成が「抽象的有意義性の原理」に基づいていることへの認識が十分には生かされていないように思われる。<sup>17)</sup>

3.4. W. シャイプマイルの『N. ルーマンのシステム理論と Ch.S. パースの記号理論』(Scheibmayr 2004)は、詳細な両者の紹介を対照的に行っている。著者は、ルーマン後期のメディア論に注目し、「メディアムと形式の区別」が「存在論的な立場からではなく、差異を形成するシステムの操作」にかかわる「観察」に基づくことを指摘している(ibid.: 97)。彼によれば、ルーマンが「システムの操作」をオートポイエティックの原理から考え、パースが「(潜在的には)無限の記号過程」を念頭においていることとの間には、ある種の共通性が認められる(vgl. ibid.:168; 220, u.a.)。そして「構成主義的な」(ルーマン)および「表象主義的な」(パース)アプローチが「記号体系のなかで整合的に統合可能である」(ibid.: 356)とされている。他方、記号の3次性を基本とするパースの思考方法は、2価性を基本とするルーマンのシステム理論よりも「より柔軟で、より統一的で、より多層的である」(vgl. ibid.:358)。従って、  
— 彼はルーマン理論の構成主義的な視点がパース理論の相対化に寄与することを予想しながら— パースの記号理論のもとでの両者統合の可能性を期待している(ibid.)。いままで殆ど試みられなかったパースとルーマンの理論の比較・対照が行われて、その意義は大きい。しかしいくつかの疑問がのこる(後述)。

<sup>16)</sup> ソシュール再評価に関しては脇阪 2005 の記述参照。

<sup>17)</sup> ビューラーのコミュニケーション・モデルでは、その都度の場面のなかでの「記号のやりとり」が前提とされている。記号は一定の場面の中で用いられることで成立する。このときの「抽象化」のプロセスのなかで記号は「意味」を獲得する。

3.5. コミュニケーションに関する総合的な考察ないし記述は、その必要性があまりにも当然のことであるから、例えば、哲学的考察(パース)、社会学的方法(ルーマン)に見られるような「分野横断的な」志向をもつ考察が、言語学の分野でさほど熱心に論じられてこなかったのではないだろうか。いまテキスト言語学の展開がようやく、その可能性を予告しつつあるように思われる。このとき、いくつか考えられる可能性のうち、「テキスト種類」Textsorten と「間テキスト性」Intertextualität の2つの問題圏の関連性を整理し、その成果を「メディア論」に結びつけることが考えられる。しかしそれは、今までのテキスト言語学の領域を越えざるを得ない。たとえば、テキスト形成の基本には、各種の構成要素の「くりかえし」の原理がある。<sup>18)</sup> 本稿ではこの原理を「媒介」という視点から考えなおそうとしている。媒介作用と各種くりかえしの「ふるまい」とは、密接に関係しあっているはずである。この領域での現象を整理すればテキストとメディアの関係を記述するときの有効な手段が見出せるのではないか。

3.6. 1960年代以降の言語学の主流は、その手法や立場の相違にも拘わらず、またその多様性にも拘わらず、そしてそれぞれがもつ理論的前提の如何にかかわらず、いかなれば最も広い意味での「経験的」分析と記述に頼ってきた。このことは「理念的話者」を前提とする生成文法から、いわゆるコーパス言語学における資料分析にいたるまで、根底においては異ならない。それらに共通しているのは、たとえ想定上、あるいはまた理念的に作り上げられている場合であっても、取り上げられる事例は、言語の「形式」である。このときルーマンの意味での「メディウム」との関わりは捨象されて、ひたすらに形式が、記述者自身の言語感覚に頼りながら整理されている。これらに、いくつかの社会言語学の流派の仕事を加えるにしても、その事実は変わらないだろう。言語とはなによりも用いられるものであるから、この意味で、すべての言語研究のあり方が、ルーマンの意味でも、またパースの意味でも、「メタ理論」からは程遠いものであり、それはそれで<正当な>あり方なのかもしれない。しかし、本稿第1章で紹介したように、今日のテキスト言語学は、狭義の「言語学」であることを越えて新しい「テキスト学」として展開しつつあることを認識するとき、いままでの自明の理を再検討することが求められる。

このように事態を整理したうえで、改めて(学際的ではなく)「分野横断的」transdisziplinär な立場をとってみたい。<sup>19)</sup> ここでわたしたちは改めて本稿第1章の

---

<sup>18)</sup> これについては、本稿とほぼ同時に発表される拙稿「テキストとメディア」(脇阪 2005)参照。

<sup>19)</sup> 「学際性」を強調するシャイプマイルの立場を、「分野横断的」な立場から批判することはやさしい。しかしここではむしろこの著者の積極性を評価したい。その上で一つだけ、この著者に不十分な「歴史性」の視点を挙げておく。言語にせよ記号にせよ、この視点なしには「分野横断性」は

ポウグラントの指摘に戻ることになる。それがこれからの「テキスト学」が目指す方向ではあるまいか。「テキスト」という概念あるいは「立場」をめぐって、じつに多くの記述、分析、考察があり、かつ各種さまざまな評価がなされている。筆者が承知する限り、それらの多くが、なおゆらぎのなかに漂っている。

ポウグラントも言及するように、改めて *Text/Texte/Klassen der Texte* (Hartmann 1964/1972) というテキスト言語学の原点に戻ってみることである。この3カテゴリーに、ルーマンの *Medium/Medien/Form* の使い分けを対比させてみてはどうであろうか。そのとき、60年代以降今まで省みられなかった、言語のメタ理論構築が可能になるかもしれない。このメタ理論を可能とする言語考察は、かなり安易になされてきたテキストへの「依存」でもなく、そしてよりいっそう安易になされているかにみえるテキストからの「離反」でもない。それはポウグラントの志向にある、新たな「テキスト学」として、分野横断的な仕事の前提となり、かつ実践の一部となるはずである。テキストとメディアの関係を探求する仕事も、そのなかに位置づけられるであろう。<sup>20)</sup>

#### 4. テキストとメディア

4.1. マクルハーン(1911-1980)の『メディア論』(1964)の冒頭では、「メディアはメッセージである」(邦訳 1988: 7)と宣言されている。ところで、テキストは用いられるときに始めてテキストとなるのであるから、この行為としてのテキストは、メディアにほかならない、ということが出来る。「どんなメディアでもその<内容>はつねに別のメディアである」(ibid.: 8)というマクルハーンの考えは、すべての記号には別な記号過程が先行するという「無限の記号過程」についてのパースの発想と殆ど合致している。「記号によって媒介されるのは、つねに先行する記号過程により媒介される現実と、その解釈」(Nöth 2000: 469)なのである。— 以上のようにみえてくると、メディアは、狭義の「コミュニケーション手段であることを越えて」(Elsner et.al. 1994: 166)、社会の構成要因へと拡張されるといえる。

『メディア論』第1章の終わり近くに、原料は「技術のメディア」であり、この「原料」(あるいは天然資源)に依存する社会の経済のなかに「明白な社会組織のパターン」が見られる、という記述がある。マクルハーンによれば、(ある時期までの)アメリカ南部は綿花や石油という「原料」に依存した社会であったが、この社会では独自のペースとユーモアという、「独特の香り」が漂っていた(邦訳:22)。このような、

---

現実化できないと思われる。

<sup>20)</sup> Adamzik(2004)では、テキストの「媒介性」(Medialität)を文化史の流れのなかで整理しようと試みているが、その基本は伝統的な文学ジャンル論からさほど抜け出していないようである。

地方色ゆたかなメディアのありかたに対して、現代社会の共通現象は、広告メディアにみられる無機質の「香りのなさ」ではないだろうか。コマーシャル・メッセージのくりかえしは、くりかえしそのものがひとつの意味作用を果たし、そのメッセージのなかに、消費者である受け手は理想化された自己を、共感的にそして一様に投影できるし、またそのように強制されてさえいる。これを欲求の「擬似的達成」と呼ぶことができる（『レトリック小辞典』2002: 49f. 参照）。「社会生活は完全に表象からなりたっている」（デュルケーム）ののだが、こうした「集団表象」も、改めてメディアの「はたらき」の分析を通して捉えかえすことができると思われる。<sup>21)</sup> 「メディア」は、<ことがら>を「媒介」するにとどまらず、それぞれのことがらになんらかの新たな「意味付与」を行い、それらを<出来事化>している。それはもはや自由な出現ではない。この強制されている現実が、わたしたちに改めて「テキスト」の考察に向わせる。そしてこのとき得られるテキストからの問題意識が、ふたたびメディアを観察する視点を形成してくれるはずである。 — メディア各論の絢爛さあるいは精密さにくらべて、<メディアとはいったいなんだろう>と問う立場はそれほど鮮明ではない。本稿では、各種メディアの実際を念頭におきながら、そうした各論とはいくらか異なる視点からメディアそのものについて考えてみた。

#### まとめにかえて

高樹のぶ子の小説『サザンズコール』（1990）では、友人・夫婦・恋人というような人間関係が、異常な錯綜のなかで描かれている。これら人間関係を仮に織物の横糸にととると、その縦糸として、繊維、服飾、染色などに関わる各種の組織とそれらの仕事に従事する人々があげられる。当然このふたつのレベルで描かれるのは、同じ人物たちであるけれども、彼らがテキストのなかに姿を現すとき、いうなれば「個」としての人間同士のつきあいと、社会的な各種の「組織」に組み込まれたものの行動とが、複合的に絡み合っている。そしてこの二つのレベルにまたがって設定されている共通項が「媒染」と名づけられるモチーフ群である。<sup>22)</sup> この小説の筋は、自然の花にしか見られない「赤」を染め出すために、特定の「媒染体」を追求するひとびとによって構成されている。「織物」の縦糸と横糸をつなぐ未知の「媒染体」の探索が、この小説のテーマである<人間関係の追及>を具体化している。その背景には、社会

<sup>21)</sup> W. ネットは、現代社会の特徴として、日常生活の中での速度変化（強いスピードアップ）を指摘している。テキストとメディアの両視点から、この探索が可能であろう。

<sup>22)</sup> 以下では、2000年（6版）の新潮文庫版を用いる。「媒染」とは、染色しようとする繊維に、あらかじめ鉄やアルミニウムその他の金属（媒染体）を固着させておき、染料の吸収を促進したり、媒染体の種類により発色を変えたりすること。例えば、草木染で梔子（くちなし）の実にアルミや銅の「媒染」を加えると黄色になり、鉄媒染を加えると黄緑色になる。

システム（ルーマン）としてのコミュニケーションの広がりと錯綜がある。

服飾デザイナーの沖間八重(1)と、沖縄工業指導所の染色部門の課長平沢(2)との間に交わされる会話が、まず染色の秘密を暗示している。

- (1a) 「(…)ときどき、真赤な花を見ると、ああ、あの赤をそのまま布の上に欲しい、と思うわ。これはデザイナーとしてじゃなく、女としての欲望だわね」
- (2a) 「男だってそうだよ。(…) あの赤い色素をそのまま布の上に移しかえられないんだって苛立つよ」
- (1b) 「なぜ、できないの。花の中に、ちゃんと色素として存在しているのに」
- (2b) 「ひと口で言ってしまうと、花は生きているからだよ。生体の中で微妙なコントロールを受けて、アントシアンは発色する。カンナの赤とバラの赤は、微妙に違うだろう。それぞれの生体の状況が、それぞれの赤を作り出す。(…)」(165f)

活きた植物中のアントシアンの安定した赤は、「分子間錯体」と称される「何か別のものとの結びつき」の結果である。この自然のアントシアンを人為的に固定できれば、それは「ノーベル賞ものだ」とも記されている。「抽出したアントシアンに、タンニン類やフラボン類の天然色素を加えると、青い色に」なったりする(166)のだが、「自然の赤は定着できない」のである。

この小説の中心人物は、20才をこえたばかりの沖縄・宮古上布の織子、下地耀子である。不幸な生涯を終えた彼女の母親良江が、自ら命を絶った湯船に、その裸身を包み込んでいた着尺の鮮烈な「赤」の記憶が耀子の人生を導いている。この赤は、20数年後の今も色あせることなく、そして他に類比を許さない独自の輝きをもち、これに出会う女たち、男たちに、その秘密を解きあかそうとの衝動を誘いおこす。耀子は「ときどきその色、夢で見るんです」とうち明ける(170)。

八重の学生時代の恋人、杉野隆三は大手繊維企業のポリエステル部門の責任者である。その彼の前に、運命の流れにのって問題の着尺の赤が現れる。それは、彼の今までの豊富な経験のなかの「どれとも違う」、「朱色がかかった、鮮やかというより峻烈な激しさを発散させる赤」(415)である。「そこに赤い川が出来た。彼は目をこらしてみた。上から、そして斜めから、目を近づけたり離したりして確かめたが、その着尺は赤一色で【・・・】赤の染めむらさえ見つからず、わずかに室温が上昇したような、華やかな熱気が溢れただけであった」(416)。

この小説テキスト全体に通底し、求められ、探索され、追及され、問いかけられ、解き明かそうとされる「媒染」の実体は、最後まで謎として残されている。その秘密を求めて駆け巡り、汗をながし、希望と失望が交錯するさまざまな葛藤の渦に引きこまれたひとびとは、最後にはふたたび日常の生活世界に戻ろうとする。

ボウグランドはその論文の表題をゲーテの『ファウスト』中の「新しい日が新しい岸へおれを呼ぶ」から採用し、その論考の最後で、テキスト言語学は「好むと好まざるとに拘わらず、我々がまだその詳細な地図をもってはいない風景に向かいつつある」と述べている(Beaugrande 1997:10)。

## 文 献

日本語文献中、翻訳書では、斜線の前は原著の刊行年を、斜線の後は日本語訳の刊行年を示す。外国語文献では、斜線の前は初版を、後は本稿で利用した版を示す。なお注などで言及した文献指示には、スペースの関係で簡略化したものがある。

- 有馬道子 (2001): 『パースの思想 記号論と認知哲学』 (岩波書店)
- デイヴィス (W.H. Davis: 1972/1990): 『パースの認識論』 赤木昭夫訳 (産業図書)
- パース (Peirce, Ch. S.:1986): 『パース著作集 3 形而上学』 遠藤弘 編訳 (勁草書房)
- (Peirce, Ch. S.: 2001): 『連続性の哲学』 伊藤邦武訳 (岩波文庫)
- ピューラー (Bühler, K.: 1934/1983; 1985): 『言語理論』 上・下 脇阪豊他訳 (クロノス)
- ボウグランド/ドレスラー (Beaugrande, R. de /Dressler, W.: 1981/1984): 『テキスト言語学入門』 池上嘉彦他訳 (紀伊国屋書店)
- マクルハーン (McLuhan, M. 1964/1988): 『メディア論、人間拡張の諸相』 栗原裕他訳 (みすず書房)
- ルーマン (Luhmann, N.:1884/1993;1995): 『社会システム理論』 上・下 佐藤勉監訳 (恒星社厚生閣)
- 脇阪 豊 (2003) 「テキスト・テキスト性・文学テキスト」、In: 『ドイツ文学』 112号 (日本独文学会)、1-13.
- (2005): 「テキストとメディア」、In: 『テキストから読み解く文化』 (印刷準備中)
- 脇阪 豊、川島淳夫、高橋由美子 (2002): 『レトリック小辞典』 同学社
- Adamzik, Kirsten (2004): *Textlinguistik. Eine einführende Darstellung.* Tübingen (Niemeyer)
- Beaugrande, Robert (1997): Textlinguistik: Zu neuen Ufern? In: Antos, Gerd/Tietz Heike (Hrsg.), *Die Zukunft der Textlinguistik. Traditionen, Transformationen, Trends.* Tübingen (Niemeyer) 1-11.
- (1997a): *New foundations for science of text and discourse: Cognition, Communicatin, and the Freedom of Acces to Knowledge and Society.* Norwood, New Jersey (Ablex Publishing)
- Elsner, Monika et.al. (1994): Kulturgeschichte der Medien. In: K. Merten et.al. (Hrsg.

1994) (163-187).

Esposito, Elena (2000): Ist ein Gedächtnis der Emergenz möglich? In: Wägenbaur (Hrsg. 2000), 75-86

Gülich, Elisabeth/Raible, Wolfgang (Hrsg. 1972): *Textsorten. Differenzierungskriterien aus linguistischer Sicht*. Frankfurt a.M. (Athenäum)

Hartmann, Peter (1964/1972): Text, Texte, Klassen von Texten. In: *Bogawus 2*. (後に W. Koch 編の *Strukturelle Textanalyse*, Hildesheim/Olms に収録された。1-22)

Heinemann, Wolfgang/Viehweger, Dieter (1991): *Textlinguistik. Eine Einführung*. Tübingen (Niemeyer)

Lewes, George Henry (1875): *Problems of Life and Mind*, Vol. 2, London

Luhmann, Niklas (1988/2002a): *Die Wirtschaft der Gesellschaft*. Darmstadt

-- (1995/2002b): *Die Kunst der Gesellschaft*. Darmstadt

-- (2002c): *Die Erziehung der Gesellschaft*. Darmstadt (遺稿)

以上の3点は、いずれも Wissenschaftliche Buchgesellschaft から刊行された著作集。

Merten, Klaus/Schmidt, Siegfried J./Weischenberg, Siegfried (Hrsg.1994): *Die Wirklichkeit der Medien. Eine Einführung in die Kommunikationswissenschaft*. (Westdeutscher Verlag)

Nöth, Winfried (2000) : *Handbuch der Semiotik*. 2. Aufl. Stuttgart (Metzler)

Peirce, Charles S. (CP): *Collected Papers of Charles Sanders Peirce* Vol. 1-6 ed.

by Ch. Hartshorne/P. Weiss (1931-58/1998: Bristol/Thoemmes Press); Vol. 7-8 ed.

By A. W. Burks (1931-58/1998: Bristol/Thoemmes Press).

-- (1988): *Naturordnung und Zeichenprozess. Schriften über Semiotik und Naturphilosophie*. Hrsg. v. H. Pape. Aachen (Arno Verl.) パースの *Centry Dictionary* への寄稿は合計 36 項目で、この書物の付録として編集されている (431-484)。

Peirce, Charles Sanders (2000): *Semiotische Schriften*.3 Bde. Hrsg. v. Klosel,

Chr./ Pape, H. (このドイツ語訳では、パースの著作が執筆年代順に編集されている。)

Scheibmayr, Werner (2004): *Niklas Luhmanns Systemtheorie und Charles S. Peirces*

*Zeichentheorie. Zur Konstruktion eines Zeichensystems*. Tübingen (Niemeyer)

Stephan, Achim (2000): Eine kurze Einführung in die Vielfalt und Geschichte emergentischen Denkens. In: Wägenbaur (Hrsg. 2000). 33-47

Wägenbaur, Thomas (2000): Emergenz der Kommunikation, In: ders (Hrsg.2000), 123-141.

Wägenbaur, Thomas (Hrsg. 2000): *Blinde Emergenz? Interdisziplinäre Beiträge zu Fragen kultureller Evolution*. Heidelberg (Synchron).

(もと天理大学・国際文化学部教授)